

平成二十八年十二月十日発行
皇學館論叢第四十九卷第六号 抜刷

紹介

塚口義信著 『邪馬台国と初期ヤマト政権の謎を探る』

荊 木 美 行

塚口義信著 『邪馬台国と初期ヤマト政権の謎を探る』

荊 木 美 行

塚口義信博士（以下、「著者」と称する）は、処女作「三韓の用語に関する一考察―日本書紀資料論研究序説―」上・下（『日本歴史』二五八・二五九、昭和四十四年十一月・十二月）以来、半世紀近くにわたって、日本古代史研究をリードしてきた斯界の重鎮である。本学でも、かつて神道研究所の公開講演会にお越し、貴重な話をうかがったことがある。

本書は、著者の膨大な研究のなかから、とくに日本古代国家の形成にかかわる重要なテーマを取り上げた論文六篇を捫（えら）んで編んだものである。もともと、「論文」とはいうものの、著者の文章は本来が平易かつ明快であり、そのうえ、このたびの再録にあたっては、引用史料を読み下し文に改め、読者の理解を

助けるために図版を追加するなど、随所に一般向けの工夫が施されたので、専門家以外のかたがたにも親しんでいただけると思う。

著者のこの種の著作としては、平成五年九月に学生社から刊行された『ヤマト王権の謎をとく』がある。同書も、平易な語り口で一般にも親しみやすい形をとるが、じつはきわめて質の高い古代国家形成史の研究であり、学界にも大きなインパクトを与えた好著であった。

まず、本書の目次を示しておこう。

はじめに

第一部 邪馬台国の謎を探る

第一章 『魏志』倭人伝を読むにあたって

第二章 『魏志』倭人伝の原史料

第三章 邪馬台国への道程

第四章 邪馬台国所在地論研究小史

第五章 邪馬台国はどこか

第六章 卑弥呼の鬼道と三角縁神獸鏡

第Ⅱ部 初期ヤマト政権の謎を探る

第一章 初期ヤマト政権とオホビコの伝承

第二章 初期ヤマト政権と山城南部の勢力

― 椿井大塚山古墳の被葬者像

第三章 初期ヤマト政権と磐余の勢力

― 桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳の被葬者像

第四章 初期ヤマト政権と丹波の勢力

― 丹波の首長層の動向とヤマト政権の内部抗争

むすびにかえて

これをご覧いただければおわかりのように、本書は二部構成で、前半は邪馬台国研究、後半は初期ヤマト政権にかかわる個別研究四篇を収録する。時代でいうと、前半は初期三世紀史、後半は四〜五世紀史に相当する。

「はじめに」にも述べられているように、七世紀に成立する古代国家には、それ以前に長い形成史があった。このうち、誰

もが知っているのが、三世紀の邪馬台国を軸とした倭国の存在である。いつぼう、これはべつに、のちに律令国家を創出する政治勢力（いわゆる「ヤマト政権」）が存したことも周知のとおりであり、その存在も、近年では三世紀にまで溯るといわれている。

この二つの政権がいかなる関係にあるのかということ、古代史上きわめて重大な問題である。かりに、邪馬台国が畿内大和にあったとすれば、三世紀前半の段階で倭国はすでに西日本規模の統一政権を確立していたことになり、それがそのままヤマト政権に継承されていくことになる。しかし、邪馬台国の所在地が九州だとしたら、そうした広範囲に及ぶ統一政権を想定することは不可能である。そうなると、九州に存した邪馬台国と大和にあったヤマト政権は、いかなる関係にあったのか？が問題となる。

こうしてみていくと、いわゆる邪馬台国論争は、たんなる知的遊戯ではなく、日本古代国家の成立過程をどのように把握するかという一大議論であることがおわかりいただけると思う。

とはいうものの、この問題の解決の糸口となるのは、わずかに二千字足らずの魏志倭人伝。それも肝心なところで情報不足という、いかにも心もとない史料である。また、援用すべき考古学的資料にしても、研究者によってその理解に大きな懸隔があ

る。そうしたことが相俟って、多年にわたる研究の蓄積にもか
かわらず、論争に終止符が打たれるに至らないのが、現状で
ある。

○

著者は、本書第Ⅰ部において、果敢にこの難問に挑戦してい
る。すでに議論が出尽くした感があり、決定打に乏しい邪馬台
国論争において、あえて自説を公けにすることは、研究者とし
て揺るぎない信念と高い見識がもと需められるところである。著者
も、それまで非公式には邪馬台国Ⅱ大和説を口にされることは
あったが、じゅうぶんに想を練り、私見の公表に踏み切ったの
は還暦を過ぎてからのことである。まさに満を持しての感が
ある。

第Ⅰ部は六章にわかれているが、「はじめに」の初出一覧に
もあるように、もとは「講座・邪馬台国と倭女王卑弥呼―邪
馬台国所在地論管見―」と題する一連の講演速記であり、その
点、一篇一篇が独立した第Ⅱ部とは趣きが異なる。

本書に収録された邪馬台国論は百二十頁を超え、取り上げら
れた問題も多岐にわたるが、その内容は一言で云えば、あらた
な邪馬台国Ⅱ大和説の提唱である。

塚口義信著『邪馬台国と初期ヤマト政権の謎を探る』（荆木）

そのポイントは、魏志倭人伝の解釈にある。すなわち、著者
によれば、魏志倭人伝の旅程記事のうち、伊都国いとく以後の部分は
放射式に読むべきであり（ただし、放射式読み方として著名な榎一
雄説は採用しない）、伊都国から水行十日ののち（伊都国→投馬国
とはべつのルートをとる）、周防灘附近に上陸し、そこから陸路
をとって東進し、大和の邪馬台国に到達したのだという。

その際、魏志倭人伝に記される「南」は「南」のままではよい
が、それは当時の中国における地理的認識では「東」、すなわ
ち畿内大和の方向にあたると考える。ここが塚口説の命脈であ
る。要するに、魏志倭人伝の編者である陳寿は、郡使の報告書
によりつつも、当時の史官の地理的認識にしたがって修正を加
え、辻褄を併せて記したとみるのである（ちなみに、著者は、里
数についても同様の解釈をとる）。

魏志倭人伝における中国人の地理概念を問題にした論文は過
去にも数多い。しかし、郡使の報告書では正しく記載されてい
たものが、伝統的な地理概念にとらわれた陳寿によって修正さ
れたというアイデアは、前人未発である。これは、魏志倭人伝
を徹底的に読み、編者の思想にまで踏み込んだ、著者ならではの
着想である。

このほかにも、著者の邪馬台国論には瞠目すべき点が少なく
ない。たとえば、著者は、卑弥呼ひみこの歿後、男王派と卑弥呼派の

うち、男王派がいったん聯合体を主導したが、のち卑弥呼派が盛り返し、女王（壹与）を立てたと推測する。そして、卑弥呼派は、みずからの正統性を示し、かつまた軍事力を維持・増強するために、「冢」の造営を継続したのだと説く。著者によれば、卑弥呼の墓の完成は壹与の時代、すなわち三世紀後半（第三四半期）だった可能性が大きく、箸墓古墳はその有力候補だという。『日本書紀』における壬申の乱勃発直前における天智天皇陵の造営のエピソードを引きつつ、卑弥呼の墓の造営と派閥の軍事力とを結びつけるくだりは、まことに興味深い。

また、卑弥呼の鬼道や三角縁神獸鏡に対する著者の理解も看過できない。著者は、卑弥呼の鬼道を、日本の土着信仰と五斗米道系の思想の習合ととらえ、道教の神仙思想などのかかわりから、三角縁神獸鏡はその祭具であったと指摘する。そして、この鏡が畿内を中心に分布することは、邪馬台国がこの地にあったことを示す有力な証拠だと考える。

三角縁神獸鏡の生産地や製造年代については、なお議論があるが、これを卑弥呼の鬼道とのかかわりで取り上げた点が注目される。その意味で、著者の研究は、今後の邪馬台国研究の一つの方向性を示唆している。

以上のような著者の学説に対しては、当然のことながら、九州説論者から反論があるろう。しかし、これはこれで筋の通った

邪馬台国Ⅱ大和説として、説得力をもって読者に迫ってくる。著者は、論文前半で、魏志倭人伝という書物の性格や、そこに出てくる用語の分析にかなりの紙数を費やしている。また、第四章「邪馬台国所在地論研究小史」などをみても、著者がいかに研究史に注意を払い、先行論文の得失を分析してきたがよくわかる。まさに「満を持して」という言葉を用いたが、細部まで行き届いたこの論文を読めば、邪馬台国問題の解明にかける著者の情熱が伝わってくる。

○

つぎに、第Ⅱ部所収の諸論文についてみておきたい。第Ⅰ部が邪馬台国を中心とする三世紀の倭国の動向を扱っているのに対し、第Ⅱ部は四世紀以降のヤマト政権がテーマである。より具体的には、初期ヤマト政権を支えた各地の政治集団とその首長に関する研究で占められている。

紹介が前後するが、巻末には「むすびにかえて」として「初期ヤマト政権における主導勢力の交替―三―四世紀における政権交替―」を収めている。このテーマにかかわる著者の論考として「四世紀後半における王権の所在」（末永先生米寿記念会編『末永米寿記念 獻呈論文集』坤（奈良明新社、昭和六十年）所収）が

あるが、これは古代史学界に大きな衝撃を与えた、記念碑的論文である。

第Ⅱ部の論文の主旨をより正確に把握するためには、この「むすびにかえて」から読み始めるのがよいと思うので、最初にこれを紹介しておく。

『古事記』『日本書紀』によれば、誉田別皇子が生まれた翌年、神功皇后は、皇子をともなつて穴門の豊浦宮から大和に帰還するが、そのとき、麿坂王・忍熊王兄弟が謀反を起こす。彼らの母は大中姫で、誉田皇子とは異母兄弟にあたる。二王は、皇后が筑紫で誉田別皇子を出産したことを知り、群臣がこの幼い皇子を天皇に立てるのではないかと不安をいだいたのである。

神功皇后撰政前紀では、兄の麿坂王は、菟餓野で戦の勝敗を占つた際に、猪に喰い殺されてしまうが、弟の忍熊王は、各地を転戦しながら、神功皇后の差し向けた数万の軍に抵抗する。しかし、最後は、琵琶湖沿岸まで敗走し、瀬田で入水したという。

この内乱は、従来、神功皇后・応神天皇に象徴される河内の政治集団と麿坂王・忍熊王に象徴される三輪山周辺の政治集団（三輪政権）の対立抗争ととらえる研究者が少なくなかった。そして、それに勝利した前者が、河内政権を樹立した、と解釈されてきた。

塚口義信著『邪馬台国と初期ヤマト政権の謎を探る』（荆木）

しかし、著者によれば、事実はそうではないという。

初期のヤマト政権は、大和とその周辺の国々に盤踞していた複数の政治集団によって構成される聯合組織であり、そのなかのもつとも有力な政治集団から最高首長が出ていた。四世紀後半、この最高首長権を握っていたのは、大和東北部から山城南部の地域を勢力基盤とする政治集団である。神功皇后陵に治定される五社神古墳（墳丘長二七五メートル）など、当時としては最大規模の前方後円墳が集中する佐紀盾列古墳群西群（現奈良市山陵町附近）を築造したのも、この集団であり、その正統な後継者が鳳坂王・忍熊王であった。

ところが、四世紀末に、最高首長の座をめぐる内紛が生じ、反主流派であった神功皇后・応神天皇の名で語られる一派が勝利を得た。記紀は、麿坂王・忍熊王を反逆者のように描くが、これは、のちに応神天皇を正統な後継者とする体制のなかでまとめられたことに原因があるという。

ちなみに、著者によれば、この内乱において応神天皇側の後ろ盾となった勢力の一つに、河内の政治集団があった。記紀の皇統譜によれば、応神天皇は、品陀真若王の娘仲津姫命に入り婿したことになっている。品陀真若王は、「ホムダ（ホムタ）」という名からもわかるように、河内国古市郡誉田附近を拠点とする政治集団の首長だったと考えられる。彼は、内乱のあと、

佐紀の政治集団から応神天皇をむかえることによって、ヤマト政権の正統な後継者としての立場を確立する。五世紀にはいり、最大規模の前方後円墳が古市古墳群に移動しているのも、応神天皇の「入り婿」を境に、最高首長の座が佐紀から河内に移ったことによると考えると、うまく説明できるのである。

著者の提唱した王権の移動に関する新説は、従来の学説に再考を迫るものとして注目され、かつては、崇神天皇にはじまる「三輪王朝」が減び、四世紀後半になると、王権は「河内王朝」へと受けつがれていくという考えが主流を占めていた。直木孝次郎氏なども、ある時期までは「三輪王朝から河内王朝へ」という考えかたであったが（『応神王朝論序説』（『難波宮址の研究』第五（昭和三十九年九月）、のち、同『日本古代の氏族と天皇』（塙書房、昭和三十九年）所収）、のちに著者の研究を受け入れ、大きく考えを改めている（『応神天皇と忍熊王の乱』上田正昭ほか『日本古代王朝と内乱』（学生社、平成元年）所収、『奈良市史』通史一（吉川弘文館、平成二年）の第二章「古代社会の発展と氏族」参照）。

著者がかかる構想を抱きはじめてのは、昭和五十年代に入ってからであろうか。その素描をはじめて世に問うたのが、ここに収めた「『三輪の王者』から『佐紀の王者』へ」（原田伴彦・作道洋太郎編『関西の歴史と風土』（山川出版社、昭和五十三年）所収）であり、著者にとっても思い出深い一篇であろう。なお、前掲

「四世紀後半における王権の所在」は専門的な論文なので、一般のかたにはさきに紹介した『ヤマト王権の謎をとく』に収められた「佐紀盾列古墳群とその被葬者たち」をお勧めしたい。

○

さて、思わず「むすびにかえて」に深入りしたが、こうした構想は、第Ⅱ部各論の理解にも大きく影響する。以下、各章の内容をみていこう。

第七章「初期ヤマト政権とオホビコの伝承」は、昭和五十三年九月に確認された埼玉県稻荷山古墳出土鉄剣銘の分析を中心に、そこにみえる意富比埜と記紀にみえる「大彦命（大毘古命）」の関係について考えたものである。

意富比埜おほびこを「大彦命（大毘古命）」にあてる根拠としては、①名が一致する、②両者の活動していた年代がほぼ一致する、③雄略天皇朝にすでにオホビコ伝承の原型となるものがあつたと推察され、鉄剣銘の意富比埜がこれと無関係であつたとは考えられない、④オホビコおよびその後裔氏族（阿倍氏や膳氏など）は東国（武蔵）と深い関係を有する、といった諸点があげられるが、著者は、①は、偶然の一致も考えられるので、決め手となりえないことを指摘。また、②も、記紀の系譜に依拠した世

代の算出法には方法論的に無理があり、しかも、皇統譜と鉄劍銘文の乎獲居臣の系譜には二世代の食い違いがあると、これを斥ける。②・③については、結論的にはしたがうとしながらも、意富比埜の性格をあきらかにしなければ決定的な論拠とはなりえないとして、独自のアプローチから、意富比埜⇨オホビコを論証する。すなわち、著者は、銘文中の「世々」が「意富比埜以来、代々」の意味であったことを確認した上で、だとすると、雄略天皇朝には意富比埜もまた「杖刀人の首」（將軍ないし親衛軍の首長）とする認識が存在していたと考えなくてはならないとする。

またいつぼうで、倭王武の「上表文」にみえる征服伝承の分析から、銘文が刻まれた辛亥年、すなわち四七一年には、四道將軍の一人として大王に仕え、大いに功を成したというオホビコの英雄伝説がすでに語られていたことを指摘する。その結果、「軍勢を率いる將軍としての両者のイメージは全く等しく、これを偶然とみることはできないであろう。「天下を左治した」という乎獲居臣の誇るべき始祖（意富比埜）の姿を古典のなかにもとめるとすれば、それはこのオホビコ以外にない」とのべ、これを論拠③と重ね合わせることによって、意富比埜⇨オホビコが確定するとしている。

ともすれば、自明のことのようにいわれる意富比埜⇨オホビ

塚口義信著『邪馬台国と初期ヤマト政権の謎を探る』（荆木）

コ説ではあるが、これを承認するには、こうした論証の手続きを経る必要がある。

つづく第八章「初期ヤマト政権と山城南部の勢力―椿井大塚山古墳の被葬者像―」は、三十二面もの三角縁神獸鏡がみつかったことで知られる椿井大塚山古墳の被葬者について推測したものである。同古墳の被葬者については、崇神天皇朝に叛乱を起こしたタケハニヤスピコを候補にあげる研究者が多い。しかし、著者は、叛乱によって討伐されたタケハニヤスピコは古墳の規模や副葬品からみて相応しいとはいえず、後継の大首長墓（平尾城山古墳・墳丘長約一一〇メートル）が存在することも、タケハニヤスピコ説には不利だとする。

著者が注目するのは、開化天皇記にみえる日子坐王系譜である。著者によれば、日子坐王は、初期ヤマト政権の有力な構成メンバーで、大和北部から山城南部、さらには近江・丹波（特に丹後半島）と深い関係をもっていた人物を伝承化したものであり、この王こそ椿井大塚山古墳の被葬者に相応しいとする。

古墳の被葬者の推定はむづかしい問題だが、著者は、徹底した文献の読み込みと、考古学の成果のじゅうぶんな咀嚼とから、すでにこの方面で大きな成果をあげている。たとえば、平野穴塚山古墳の被葬者を茅渟王とみる説（「茅渟王伝考」『埜女子短期大学紀要』二五、平成二年三月）や狐井城山古墳を武烈天皇陵

とみる説（「香芝―古代史の謎を探る①・④・⑤―」『香芝遊学』四・七・八、平成七年五月・同十年五月・同十一年五月）、また最近でも、飛鳥で発掘された小山田遺蹟（古墳）を蘇我蝦夷の墓とする新説において（小山田遺跡についての若干の臆測）『古代史の海』八〇、平成二十七年六月）、そうした手法が遺憾なく発揮されている。

ちなみに、このテーマに関連する著者の論文として、「天皇陵の伝承と大王墓と土師氏」（網干善教先生古稀記念考古学論集刊行会編『網干善教先生古稀記念 考古学論集』下（網干善教先生古稀記念考古学論集刊行会、平成十年二月）所収）や「古市・百舌鳥古墳群と王統の確執」（『勝部明生先生喜寿記念論文集』平成二十三年二月）などがあり、いずれも逸することのできない好論である。被葬者の問題に関心を抱かれるかたには、必読の論文である。

つづく第九章「初期ヤマト政権と磐余の勢力」も、桜井茶臼山古墳・メスリ古墳の被葬者像に迫る秀逸な一篇である。隔絶した規模と豊かな副葬品を誇るこれら大和盆地東南部の二つの前方後円墳については、これを初期ヤマト政権の「盟主墓」（大王墓・倭国王墓とも）にとらえる研究者が多かった。しかし、著者は、

①桜井茶臼山古墳・メスリ古墳の周辺には天皇陵伝承が存在しない、

②この地域には、王権の祭祀にかかわったとされる巫女の伝

承や、キサキ・皇女の陵墓伝承もない、

などの点から、大王墓とみることに疑いを抱く。そしていっぽうで、初期ヤマト政権において大王を「左治」した重臣、とりわけ、この地域とかわりの深いオホビコ・タケヌナカハワケ父子（いわゆる四道將軍のうちの二人）の伝承に注目し、記紀にこれらの名で登場する人物こそ桜井茶臼山古墳・メスリ古墳の被葬者ではないかと推測する。

なるほど、著者のように考えると、

①桜井茶臼山古墳・メスリ古墳の築造年代が三世紀後半から四世紀前半にかけての時期である、

②二つの古墳の築造年代に一世代ほどのひらきがある、

③メスリ古墳の副葬品に大量の武器があり、被葬者の武人的性格を彷彿させる、

といった考古学の成果ともよく合致する。まことに穏当な推論というべきであろう。

最後の第十章「初期ヤマト政権と丹波の勢力―丹波の首長層の動向とヤマト政権の内部抗争―」は、四世紀末に丹波地方の政治集団の首長層に変動が生じたことを、ヤマト政権の内部抗争とのかかりで論じたものである。著者は、網野銚子山古墳の墳形が、佐紀古墳群の佐紀陵山古墳や神戸市垂水区の五色塚古墳のそれと酷似することや、丹波出身で垂仁天皇皇后（大后）

となった日葉酢媛が「佐紀の寺間陵」に葬られたと伝えられることなどから、四世紀代の丹波の政治集団は、佐紀政権と密接な関係にあったとみる。ただし、著者によれば、四世紀末のヤマト政権の内部抗争の結果、その勢力は衰退し、かわって応神天皇側に加担した海部直氏（あまののちぢい）が五世紀に入って擡頭してくるという。短篇ではあるが、丹後地方の盟主墳の推移にも目配りし、考古学と文献との整合的な解釈を摸索した研究として注目される。

なお、第II部に関聯する著者の論文としては、「四、五世紀の葛城南部における首長系列の交替」（『東アジアの古代文化』一三七、平成二十一年一月）・「百済王家の内紛とヤマト政権——四世紀末の争乱と関連して——」（『塚女子短期大学紀要』四四、平成二十一年三月）・「五世紀のヤマト政権と日向」（『つと』二六二、平成二十一年十月）・「四・五世紀における近江の政治集団とヤマト政権」（『大阪大谷大学文化財研究』一二、平成二十四年三月）などがある。いずれも、各地の大型古墳とその被葬者である首長層の動向を、四世紀後半のヤマト政権内部の抗争とそれに伴う政権交替とのかかわりで論じた斬新な研究なので、参照を希望する次第である。

○

以上、駆け足ではあったが、本書所収の諸論文の概要を紹介しつつ、その特色とするところや、研究史上の価値についてのべてきた。

著者の研究の特色を一言で云えば、徹底した史料の読解と柔軟な発想に裏打ちされた、独創的なアプローチにある。これは、餘人の追隨を許さない、著者の独擅場（どくせんじょう）である。こうした学风は、文献史学に飽き足らず、民俗学・文化人類学・考古学など、幅広い学問領域において研鑽を積まれた結果であろう。著者と同世代の、いわゆる「団塊世代」はすぐれた研究者が数多く輩出したが、そのなかでも著者の業績には目覚ましいものがある。とくに、ヤマト政権の成立過程や氏族伝承の分野における幾多の論文・著書は、いずれも不朽の光芒（こうぼう）を放っている。名著『神功皇后伝説の研究』（創元社、昭和五十五年四月）は、その代表作である。

本書は、著者の膨大な研究業績からみれば、ごく一部に過ぎないが、それでも本書収録の諸篇は、著者の学問の神髄をよく伝えていと思う。著者の意向を汲みつつ、そうした編輯作業にあたったのは、おもに西川寿勝氏と水谷千秋・生田敦司の両氏である。評者も、編集委員に名前を連ねてはいるが、わずかに校正をお手伝いさせていた程度で、本書の誕生は、上記三氏に負うところが大きい。

著者は、本年めでたく古稀を迎えられた。八年前に堺女子短期大学学長を退かれたのちも、これまで温めてこられたテーマ

についての執筆や、市民講座等での講演活動に多忙な日々を過ごしておられる。そして、その合間を縫うように内外の遺蹟を丹念に調査しておられるのであって、その行動力には驚嘆のほかない。

本書は、著者の古稀を祝賀する事業の一つとして企劃されたものだが、収録論文が確定していざ編輯作業が始まると、著者による旧稿の補訂は徹底をきわめた。たんなる字句の修正に留まらず、ときに数頁にわたる原稿を書き足されることも珍しくなかった。夥しい朱筆が施された原稿を目の当たりにして、編集委員は思わず襟を正したものである。当初は、旧稿をテーマ別に類聚して再構成するという単純な作業をイメージしていたが、結果として著者に多大な負担を強いることになってしまった。まことに申し訳ない仕儀であった。

最後になったが、本書の刊行を契機として、昨今やや沈滞化しているようにみえる、文献による六・七世紀以前の研究がふたたび活発化することを期待しつつ、もって拙い書評の結びとしたい。

(いばらき よしゆき・)

皇學館大学研究開発推進センター教授)

(B5判総二五五頁、本体二四〇〇円、原書房、

二〇一六年十一月一八日刊)